

# バトルガール ハイスクール PART.1

Believe

原作・監修：コロプラ  
著：八奈川景晶

---



ファンタジア文庫

2598

口絵・本文イラスト　ハル犬  
キャラクター原案　コロブラ

## 目次

一章	渋谷に行くのは私です！	6
二章	特訓です！	38
三章	堅物 <sup>かたがら</sup> とオシャレで両手に花	79
四章	悩める生徒会長の攻略法 <sup>こうりやく</sup>	113
五章	少女たちの作戦会議はお泊まり会 <sup>と</sup> で	148
六章	初めての再会	191
七章	失われた力と新たな力	217
八章	誰かのために、みんなのために	248
九章	エピソードからプロローグへ	280
あとがき		283

中1



藤宮 桜

FUJIMIYA SAKURA

中1らしからぬ大人びた発言をする  
将棋大好きおじいちゃんっ子



南 ひなた

MINAMI HINATA

大家族に囲まれて育った、  
星守クラスの元氣印



星月 みき

HOSHITSUKI MIKI

誰よりも元気で明るい、  
天真爛漫ながんばり屋さん



若葉 昴

WAKABA SUBARU

スポーツ万能な  
ボーイッシュガール



成海 遥香

NARUMI HARUKA

医師を志す、  
心優しいしっかりもの

中2



千導院 楓

SENDOIN KAEDE

プライドが高そうに見える、  
実は誰よりも努力家な名家のお嬢様



綿木 ミシェル

WATAGI MICHELLE

カワイイ物が大好きな、  
小動物系甘えん坊



天野 望

AMANO NOZOMI

ゆりとは反発ばかりだが、  
実は友達想いのファッションリーダー



火向井 ゆり

HIMUKAI YURI

規律を重んじる、威厳ある  
(つもの) 風紀委員長



常磐 くるみ

TOKIWA KURUMI

植物とお話のできる(?)  
マイペースな天然系不思議ちゃん

中3



朝比奈 心美

ASAHINA KOKOMI

少し内気で泣き虫だけど、  
心優しい巫女の女の子



蓮見 うらら

HASUMI URARA

キュートな笑顔の、  
キャピキャピ系小悪魔娘



粒咲 あんこ

TSUBUZAKI ANKO

人と話すことが苦手な  
インドア派ネットオタク



芹沢 蓮華

SERIZAWA RENGE

女の子大好きな、セクシーで  
色気あるお姉さま



楠 明日葉

KUSUNOKI ASUHA

容姿端麗、頭脳明晰の  
和風生徒会長

高1

高2

高3

## 一章 渋谷に行くのは私です！

その時、星月<sup>ほしつき</sup>みきの表情に余裕<sup>よゆう</sup>はなかった。

頬<sup>ほお</sup>をつつと汗<sup>あせ</sup>がしたり、顎<sup>あご</sup>の先からぽとりと落ちる。

自分の心臓<sup>こころ</sup>の音がはつきりと、しかしどこか遠くに聞こえる。

そんな鼓動<sup>こどう</sup>を押さえつけるように、ぎゅつと握<sup>にぎ</sup>った右手を胸に押し当てていた。深く長く呼吸<sup>くそ</sup>を繰り返す。

はやる気持ち<sup>きもち</sup>を落ち着けるように。

いや——己<sup>おのれ</sup>の闘志<sup>たうし</sup>を昂<sup>たか</sup>ぶらせるためか。

自分が持てるすべてをぶつけるため、少女は次の一瞬<sup>いつしゆん</sup>に懸<sup>か</sup>けた。

そして告げた。

「……………行くよ！」

握りしめた右手を胸元<sup>むなもと</sup>から引きはがし、渾身<sup>こんしん</sup>の力で後ろに引く。

上半身を右へと限界までひねり、改めてこぶしを握り直す。

そして繰り返し出す——つ

「じゃーんけーんぽんっ!!」

みきが出したのはグー。

その先に見えたのは——チヨキ。

「やつ……やつたーっ!!」

それまでの緊張<sup>きんちやう</sup>から解き放たれたように、みきが飛び跳ねて喜ぶ。

高々と突<sup>つ</sup>き上げた右手は勝利のグーを掲<sup>かか</sup>げていた。

「みき、やったわね！」

「よし！ アタシたちが優勝<sup>ゆうしょう</sup>だー!!」

すぐさま駆け寄<sup>か</sup>ってきたのは成海遥香<sup>なるみ はるか</sup>と若葉昴<sup>わかば ほる</sup>である。

二人ともうつすら涙<sup>なみだ</sup>さえ浮かべ、みきの勝利に歓喜<sup>かんき</sup>していた。

「それじゃ、次の渋谷奪還<sup>だつかん</sup>授業に行つてもらうのは、みき、昴、遥香で決定ね」

勝負<sup>ゆくえ</sup>の行方<sup>ゆくえ</sup>を見守っていた、神樹ヶ峰<sup>しんじゅがみね</sup>女子学園の先生——八雲樹<sup>やくもいつき</sup>が決着<sup>けつちやく</sup>を告げた。



◇ ◇ ◇

かつて、神秘的なる力を宿す神樹と、その加護を受けた少女——星守<sup>ほしもり</sup>によって地球は守られていた。

だが五年前、謎の侵略者<sup>なぞ しんりやくしや</sup>——『イロウス』によってその平穩<sup>へいおん</sup>は破壊<sup>はかい</sup>された。

通常兵器ではイロウスに歯が立たなかった人類は、生き延びるために地球を飛び出すしなく、その生活圏<sup>けん</sup>を地球外のコロニーへと移していた。

もう地球の地を踏みしめることは叶わ<sup>かな</sup>ない夢なのだろうか——誰もがそんな不安に駆<sup>か</sup>られた時、残された希望が星守だった。

星守たちは今日も戦い続ける。

イロウスから地球を取り戻<sup>もど</sup>すために。

みんなと自分たちの未来を取り返すために。

◇ ◇ ◇

「しっかし……じゃんけんって……」

呆<sup>き</sup>れたように呟<sup>つぶや</sup>いたのは御剣風蘭<sup>みつきふうらん</sup>だ。

元星守であり、樹と同じく星守たちの教師を務めている。現在は天才科学者として名を馳<sup>は</sup>せる彼女は、じゃんけんを決めるというやり方に不満だった。

「戦闘<sup>せんとう</sup>シミュレーションの成績で決めるとか、なにかなかったのか？」

「風蘭にしてはまともな意見ね」

「……ほっとけ」

チクリと痛いところを突いてくる樹に風蘭はばつが悪そうに顔を逸<sup>そ</sup>らした。

「今回は星守同士の連携<sup>れんけい</sup>を高めるための奪還授業でもあるのよ。だから単純な強さで決めちゃダメなの。お互<sup>たが</sup>いに気が知れた星守同士じゃなきゃね」

「歳<sup>とし</sup>が近い仲良し同士で組ませたのは分かる。だがじゃんけんって……」

「仕方ないじゃない。成績で決められない以上、一番公平なやり方よ」

「……そーですか」

じゃんけんなんかで決めていいのか、という疑問はなおも風蘭の胸の内に留<sup>とど</sup>まる。

しかし勝負がついた今、星守たちを見渡<sup>みわた</sup>してみると——みんな意外にも真剣<sup>しんけん</sup>に挑<sup>いど</sup>んでいたようだった。

「くっ……ワタクシのチョコキが負けるなんて……」

自分が出したチョコキを凝視しながら千導院楓が悔しそうに呟いた。  
 わなわなと震えるその背中に、ポンポンと添えられる手が二本。

「いやいや楓、チョコキがグーに勝てないのは常識じゃぞ？」

「そうだよ楓先輩、ハサミじゃ石は切れないよ？」

のじゃ口調でツツコミを入れる藤宮桜と、無邪気に正論をぶつける南ひなただった。

「このワタクシが負けてしまうなんて……。千導院家の者として、お父様にどう説明すれば……」

本気で不安そうな楓が自分の手を凝視する。

歴史ある名家の跡取り娘である楓にとっては、じゃんけん一つとっても、負けられない真剣勝負なのだった。

「楓、じゃんけんに千導院は関係ないぞ」

「なになに、楓先輩のじゃんけんってひなたのじゃんけんと違うの？ どこが違うの!？」

桜のツツコミもひなたの好奇心も、苦い敗北に沈んだ楓には届いていなかった。

「こうなったら、じゃんけんの世界に千導院だけの特別ルールを……」

「どんな負けず嫌いじゃ」

「グーに勝てるチョコキを作っちゃうの？ すこいっ！」

「……ねえ蓮華」

携帯ゲーム機片手に、粒咲あんこは気だるげに呼びかけた。

「ん？」

ウェーブのかかった髪を指でくるくるしていた芹沢蓮華が応える。

「帰ってこないね、明日葉」

「そうねえ」

二人が眺める先には、バーを出した体勢で石像のように硬直している楠明日葉がいた。  
 高校三年生組である三人は一回戦でみきに敗れていた。

意気揚々と代表を買って出た明日葉は、みきが繰り出した全力全開のチョコキに負けたのだった。

「うーん。すつごくショックだったみたいね。もう、明日葉ってば意外とカワイイんだから♡」

「生徒会長だからって意気込んでたんじゃないの？」

「でも仕方ないわ。じゃんけんは公平なもの」  
でもなんか面白いからこのまま見ていよう——言葉にせずとも二人とも思っていることは同じだった。

「だから、私はグーを出すべきだと言ったんだ！」

火向井ゆりは小さな身体を大きく乗り出して猛然と主張していた。

「だって多数決でパーになったじゃん……ねえ、くるみ？」

「うん……。さつき花壇でお花さんに相談したらパーがいいって教えてくれた」

ちっこいゆりとは対照的に大人びた二人——天野望と常磐くるみが反論する。

パッと見ると妹が姉たちに抗議しているようだが、三人とも同年代である。

「でも……でもパーで負けてしまったぞ！」

「仕方ないよ、ゆり。多数決は民主主義の基本だもん。ねえ、くるみ？」

「うん……。そうね」

望がそれとなく話を脱線させつつあった。

これにくるみが無意識に乗っかってしまう。

それに気づかないゆりがぐつと唸った。

「た、確かに……。民主主義は大切だが……」

風紀委員長である以上、規律を乱すようなことはできない——引き下がるしかないゆりだった。

そんな彼女にそっと背を向けた望が、くるみにぐつとサムアップする。

「へーん、大成功」

まんまと言いくるめられたゆりを横目に望は、話を合わせてくれてありがとくと、くるみにサインを送る。

「……？」

そんな望に、話を合わせたという自覚もないくるみは首を傾げるのだった。

「まあおおお！ うららが一番になれないなんて、こんなの間違ってる！」

ツインテールを振り乱して蓮見うらが悶絶していた。

「う、うららちゃん落ち着いて！」

「むみい……うららせんばい怖いよう……」

オドオドしながらなだめるのは朝比奈心美、怯えたように縮こまっているのは綿木ミシエルだ。

二人ともうらの勢いにすっかり呑み込まれている。

「なによ二人とも！ 負けちゃったのに悔しくないの！」

「そ、それは……残念だけど……」

「うらせんばいが怒ってる……」

「怒ってないわよっ！ 悔しがってるのっ！」

『ひい〜!!』

うらの迫力に心美とミシエルが抱き合って震えていた。

「で、でもほら！ 可愛さだったらうららちゃんがナンバーワンだよっ！」

咄嗟に心美がうらのアイドル魂をくすぐる。

「えっ……？」

「ねっ、ねっ！ ミミちゃんもそう思うよね!？」

「う、うん！ うらせんばい、最高にかわいいよっ！」

二人が涙を浮かべながら必死にヨイショすると、

「当然でしょ！ うらは未来のスーパーアイドルだもん！ 宇宙一カワイイんだから!」  
コロツとご機嫌が直ってしまうのだった。

「真剣に……挑んでたんだよな、きつと……うん」

星守クラスの表情を見渡した風蘭は、いささか自信がない様子で呟いた。

そんな中、騒ぎを鎮めるように樹がパンパンと手をたたいた。

「はい、選ばれた三人はさっそく準備に取りかかって」

『はい！』

みきと昴、遥香だけが元氣よく返事し、残る面々は落ち込んだように『ほーい』と力なく返した。

◇ ◇ ◇

「ここが……渋谷なんだね」

渋谷へと舞い降りたみきは、かつては人々があふれて賑わっていたであろう光景を思い描いて息を呑んだ。

人の手を離れた街は風化が進んでいた。

道路はあちらこちらで隆起、陥没していて、アスファルトの割れ目を雑草が埋めている。居並ぶ建物も傷みが激しく、ひび割れた窓ガラスが砂埃にまみれていた。

驚くほど静かで、なにも動かない。まるで写真を見ているようだ。  
文字通りの廃墟——人々に捨てられた街並み。

その冷たい空気にみきの喉がごくりと鳴った。

「分かっていたつもりだったけれど、こうして目の当たりにすると……」

「うん……。胸の奥の方がぎゅってなる気がするよ」

昂も遥香も感じるところはみきと同じだった。

じゃんけんトーナメントを勝ち抜いた嬉しさんなんて今は昔、自分たちは星守の代表としてここに立っているのだという覚悟がこみ上げてきた。

自然と表情が引き締まる。

「この場所からイロウスを追い払うのが、渋谷奪還授業……またみんな、ここに帰ってこられるのかな……」

『感傷に浸っている暇はないわよ』

「八雲先生！」

みきたちの意識を引き戻すように樹からの通信が飛んできた。

「五年前のあの日……イロウスが大量に現れた【審判の日】以来、人類は地球を捨てざるを得なかった……。だからこそ、この渋谷奪還授業は地球を取り戻す重要な一歩よ」

ゆつくりと、言葉ではなく決意を伝えるように樹が告げる。

五年前のあの日——現役の星守だった樹は、地球を奪われた悔しさを誰よりも理解していた。

「それができるのは、神樹の力を受けたあなたたちだけ……星守の活躍に期待しているわ」

自分たちの使命を胸に刻み込むような樹の声に、みきたちはただ、黙って頷いた。

「行こう、昂ちゃん、遥香ちゃん」

三人の身体が光に包まれる。

やがて姿を現したその身は星衣に包まれていた。

神樹の力を宿し、イロウスが放つ瘴気にも耐えうる。

星守にとっての最大の武器であり、最後の鎧だ。

「絶対に……地球を取り戻そうねっ！」

渋谷の街へと向かったみきたちは、さっそくイロウスの群れに遭遇した。

小型種が十体と少し——なにをするでもなく徘徊している。

(いよいよだ……)

剣を握るみきの右手が自然とぎゅつと締まった。

（これまでもイロウスと戦うことはあった……。でも、奪還授業を任せてもらったのは初めて……）

「大丈夫よ、みき」

力む彼女の手をほぐすように遥香がそつとなる。

「何度もシミュレーションで訓練してきたんだから、負けるはずがないわ」

「そうそう。アタシたちの見事なコンビネーションでズバツとやっちゃおう！」

昂がニカツと笑ってみきの背中をたたく。

二人の優しい声にみきの身体から緊張が抜けた。

「……うん！ ありがとね昂ちゃん、遥香ちゃん！」

改めて剣を構えたみきに、昂と遥香もそれぞれの武器を手に肩を並べる。

「……………行こうっ！」

みきのかげ声を皮切りに、三人はイロウスの群れへと突っ込んでいった。

『ギッ？ ギギギッ！』

突然の奇襲にイロウスたちの動きが止まる。

その隙を逃さずみきが斬り込んだ。



突っ込んだ勢いそのままに一体を討伐、さらに踏み込んで奥の一体を仕留める。  
イロウスが混乱から立ち直る前に、返す刀で三体目を追い詰める。

（うん、大丈夫だ）

心臓の鼓動は太鼓を打ち鳴らすように激しく、でも頭は水を打ったように冷静に。

みきは自分がやるべきことを着実に遂行した。

（できる……私にはできる……）

その自信がみきをさらに躍動させた。

飛びかかってきたイロウスが鋭い爪でなぎ払うも、その切っ先を冷静に見極めて回避、すれ違いざまに斬撃をお見舞いする。

すると今度は二体のイロウスがみきの左右から同時に飛びかかった。

どちらも迎撃するのは不可、回避も間に合わない。

初めてのピンチ——でも、みきは慌てない。

ここには大切な、信頼できる仲間がいる。

「とりゃーっ！」

「やつ！」

左右のイロウスが同時にもんどり打って倒れた。

「……………」

みきが小さく微笑む。

昴と遥香も微笑む。

それで会話は十分だった。

「あと少しっ！」

残り少なくなったイロウスめがけ、みきは再び剣を振り抜いた。

最後のイロウスがみきの剣に貫かれた。

辺りに漂うイロウスの瘴気が少しだけ薄くなった気がした。

「や……やつた……」

みきが肩で呼吸しながら状況を確認する。

被害ゼロ。昴も遥香もケガはしていない。

イロウスは残らず討伐完了。

シミュレーション訓練でもできたことのない百点満点だった。

「やったあ！」

瞬間、それまで張り詰めていた緊張の糸が緩んだ。

「イロウスを倒せたよ！」

「終わってみれば楽勝だったね」

「みきも昴も格好良かったわよ」

「そんな、遥香ちゃんだって！」

お互いがお互いを褒めまくる。

重要な任務の第一歩をやり遂げたという安心感と、お互いが無事でよかったという安堵と——そしてなによりも、仲間と一緒にやり遂げたという達成感が抑えきれなかった。

「この調子でどんどんやつつけちゃおう！」

「アタシたちにかかれば敵なしだね！」

「もう、昴ったら……」

和気あいあいという雰囲気すら漂う。

三人が三人とも、星守としての自信を確かなものにしていた。

今ならどんな大量のイロウスだって倒せそう——そんな根柢のない、でも疑う余地もない確信に満ちていた。

「そういえば、なんか瘴気がちょっと弱まったみたいだね」

一気にイロウスの群れをかたづけたためか、辺りを漂う瘴気が少しだけ晴れていた。

「でも、それだけじゃダメなんだよね？」

「ええ、このままではいずれまた、瘴気に覆われてしまうわ」

「そうさせないためにも……」

昴が星衣の下から取り出したのは——小さな結晶だった。

花のつぼみのような形をしていて、光を受けると鮮やかに七色に色づいた。

神樹の結晶である。

「これを埋めればいいんだよね？」

「ええ、神樹様の力でこの地をイロウスの瘴気から守ってくれるはずだわ」

「すごいなあ……神樹様って」

みきがしみじみと呟く。

「もう、みきったら……神樹様なんだから、すごいのは当然よ」

「でもでも！　すごいものはすごいんだよ！」

力説するみきの純心に遥香もつられてクスリと笑ってしまった。

「はいはい、よく分かりました。それじゃ、昴？」

「任せて！　これで渋谷奪還授業は成功だね！」

遥香が神樹の結晶を埋めるよう昴に促す。



昂はさっそく、アスファルトが砕けて地面があらわになったところに――

その時――地獄の釜のふたが開いたように瘴気があふれた。

「な、なに……?」

胸を締め付けるような吐き気がみきを襲った。

イロウスを退治する前と同じ――いやそれ以上に膨れ上がった濃密な瘴気だった。

「そんな！　なにが起こったの!？」

「こんなの……なんかおかしいよ！」

焦りが恐怖を呼び、恐怖がさらなる不安をかき立てる。

遥香はみきの腕をぎゅっと握りしめ、昂は神樹の結晶をお守りのように抱きしめた。

『大変よっ!』

樹からの通信が飛び込んできた。

瘴気が濃いためか、声も映像も途切れ途切れでしか伝わってこない。

それでも次の一言だけは明瞭に聞こえた。

『大型のイロウスが次々と渋谷に集まっているわ!』

最悪の現実を告げる言葉だけ残し、樹との通信は断絶した。

「八雲先生！　八雲先生っ!？」

「ダメ！　無線が通じない!」

なおも呼びかける昂を遥香が制す。

「二人とも！　急いでここを離れて……っ!？」

『ウオオオオオオンッッ!!』

低く重い雄叫びが耳をつんざいた。

よくも縄張りを荒らしてくれたな――そう威嚇しているようだった。

「くっ……遅かった!」

「これが大型イロウス……!」

雄叫びは幾重にも重なった。

前から後ろから、右から左から。逃げ場を奪うように。

「大変！　いつの間にか囲まれてる!」

「このままじゃ……!」

焦る遥香と昂が逃げ道を探す。

しかし瘴気は全方位で濃密さを増すばかりだ。

逃げられると思っているのか——か弱いシマウマを追い詰めるライオンのごとく、それがみきには分かってしまった。

ゆえに気づいた時には、彼女はまた自分のやるべきことを着実に実行した。

心臓の鼓動は太鼓を打ち鳴らすように激しく、でも頭は水を打ったように冷静に。

「……………二人とも、ここは私が引きつけるから」

導き出した最良の選択肢を伝える。

「二人はその隙に逃げて！」

「なにを言ってるの、みき!？」

「そんなことできるわけないじゃんっ！」

遥香も昂も声を荒らげた。

みきを囿にするような真似などできないと四つの瞳が訴える。

そんな二人とは正反対に、みきは努めて冷静に言った。

「でも全滅するわけにはいかないでしょ？」

「バカなこと言わないで、みき！」

「怒るよ!？」

あははと困ったように笑ったみきが、激昂する二人をなだめる。

「大丈夫、心配しないで。囿になるだけで、後でちゃんと合流するから」

みきが二人の背中にそっと腕を回した。

「私のこと、信じてほしいな？」

イロウスに襲われても彼女たちを信じて任せた自分のように。

今度は自分を信じて任せてほしいと。

二人の身体をぎゅっと抱き寄せて、みきが呟く。

「みき……」

「大丈夫だよ。絶対に戻ってくるから」

なおも食い下がる遥香をみきが優しく諭す——瞬間、

「二人とも！ 後ろ！」

昂の悲鳴が響き渡った。

みきと遥香をめがけ、巨大なイロウスが猛烈なスピードで飛びかかってきた。

「させないっ！」

「みきっ!？」

咄嗟に遥香を突き飛ばし、みきが剣を構える。

回避不能、防御不能、迎撃不能——冷静なままの頭が非情なまでの運命を告げる。それでも遥香と昴を助けるため、みきは退かない。

（二人が逃げ切るだけの時間を稼いでみせるっ!!）

恐怖を勇気で抑えつけたみに、イロウスの凶爪が振り下ろされて——

イロウスが真つ二つに裂けた。

「えっ……?」

重苦の断末魔の叫びを残しながらイロウスの巨体が沈む。

茫然とするみきの向こう——斬り裂かれたイロウスの隙間から見たのは——

「まったく……仲間割れをしている場合か?」

星衣に身を包み、やれやれと剣を構え直した明日葉だった。

「あ……明日葉先輩!」

「はい、れんげもいるわよ」

「ホント、仕方ないわね……」

自分たちも忘れないで言うように、星衣姿の蓮華とあんこが姿を現した。

「助けに来てくれたんですか!」

「ありがとうございます、明日葉先輩!」

遥香と昴がホッとした様子で声を弾ませる。

これで大丈夫だ——みきたちが安堵の表情を浮かべる。

だが、明日葉はそんな三人をたしなめるようにキッと眉を吊り上げた。

「こら、気を抜くんじやない!」

『はっ、はい!』

思わぬお叱りにみきたちが反射的に直立不動になった。

「おまえたちの渋谷奪還授業はまだ続いているぞ」

「えっ……一緒に戦ってくれるんじや……」

「なーに甘えたこと言ってるの」

あんこがじとーっと三人を見据える。

「れんげたちは、パニックになってるみんなをフォローしに来ただけよ?」

蓮華はにこやかに微笑んだまま、やはり手を貸そうとはしない。

「忘れるな、これはおまえたちの作戦だ。途中で放り投げてどうする」

明日葉がやれやれと肩をすくめた。

ここに来たのは三人を助けるためというよりも、三人に活を入れるためだった。「ちよつと予定外のことが起こったくらいで弱音をはいてるようじゃ、まだまだ修行が足りないな」

明日葉の叱責は続く。

これをしゅんとした表情でみきたち三人が猛省する。

もちろんそんな間にもイロウスたちは容赦なく牙をむいてくるのだが、これには蓮華とあんこが応戦していた。

しかし明日葉のお説教は意外に長く――

「ちよ、ちよつと明日葉！ そのくらいにしなさいよっ！」

「このままじゃイロウス全部、れんげたちで倒しちゃうわー」

本末転倒になってしまふとあんこと蓮華からクレームが入る。

「む……いやしかし、ここはしっかりと星守としての自覚を……」

「じゃ、ここから先は一年生組にやつてもらうわよ」

「明日葉のお説教タイム、おしまいね♡」

あんこと蓮華が戦闘態勢を解いた。

半数以上の仲間が次々と倒され、残ったイロウスたちは怖気づいたのか脚が止まっていた。

「みきも、昴も遥香も、慌てるな」

明日葉はさっきまでとは違って、優しい声で語りかける。

「落ち着いて戦えば勝てる実力は十分にあるんだ」

「そうよ、目の前の敵にちゃんと集中しないと」

「あんたたちの力はこんなものじゃないでしょ？」

蓮華とあんこも、みきたちの背中を押すように応援した。

「……………はいっ！」

頼れる先輩たちの言葉に、みきはさっきまでの投げやりな自分を捨てた。

（自分が犠牲になればいいなんて自分勝手だ……そんなことしても、昴ちゃんも遥香ちゃんも喜んでくれないのに……）

一人を捨てて二人を救う――そんなのは考えちゃダメなんだ。

絶対に三人で無事に戻る、そう信じなくちゃダメなんだ。

「二人ともごめんね、私ひとりで焦っちゃって……」

みきが申し訳なさそうに目を伏せる。

そんな彼女をいたわるように、昴と遥香がみきの手を握った。

「ううん、こっちこそごめん」

「アタシもなにもできなくて……」

お互いが自分に足りなかったものを謝る。

三人で協力しなくちゃいけないんだと心を一つにする。

その光景に明日葉たちは満足そうに目を細めた。

「その悔しさを忘れるな。それはいつかきつと大きな力になる」

「ほら、早く終わらせてさっさと帰るわよ」

「三人は前にだけ集中して。ちゃーんとれんげたちが後ろは守ってあげるから」

「今はただ、目の前の敵に立ち向かえ！」

最後の明日葉の言葉がきつかけとなった。

ぐっと表情にたくましさを取り戻したみきは、肩を並べる昴と遥香に頷いた。

「行こう、昴ちゃん、遥香ちゃん！」

再び剣を振り上げ、待ち構えるイロウスへと駆け出す。

「私たち、星守の力……見せてあげる！」



刃が一閃する。

一瞬の硬直の後、重力に負けたようにイロウスの巨軀が沈んだ。

「やったあああああ！」

最後のイロウスを仕留めたみきが歓喜のあまり飛び跳ねる。

「渋谷奪還授業、今度こそ成功だね！」

「こうやってひとつひとつ取り戻していけば……また地球で暮らせる日がきつと来るわよね！」

昴と遥香も興奮を抑えきれない。

一度は諦めかけた勝利だけに、こうして達成した後の充実感もまた一味違っていた。

「あれっ？ 明日葉先輩たちは？」

ようやく落ち着いてきたところで、見守ってくれていたはずの先輩三人がいないことに気づく。

「神樹の結晶を埋めて、先にコロニーに帰ったみたいだね」

「それじゃあ、私たちも戻りましょうか」

昴と遙香が踵を返した——が、みきの足取りだけが重い。

「……はあ」

「どうしたの、みき？　ため息なんかついて」

「いや、私たちってまだまだだな、って思ってた……」

結果だけ見れば渋谷奪還授業は成功した。

しかし明日葉や蓮華、あんこが来てくれなければどうなっていただろう。

きつと昴と遙香を先に逃がして自分も逃げることに必死で、それだけで終わっていただろう——と回顧する。

「結局、今回も明日葉先輩たちに助けてもらったし……」

思うところは昴も遙香も同じなのか、みきの言葉に二人ともすぐに返事ができなかった。

「……………って、いけないいけない！」

三人そろって落ち込むなんて、また明日葉先輩に怒られちゃう——みきは自分のほつぺたをパンとたたき、スパッと頭を切り替えた。

「今日はあんなだったけど、次こそは私たちで成功させようね！」

「うん……………そうだね！」

「私も頑張るわ！」

苦い記憶は次への希望で塗りつぶせばいい——三人はお互いの顔を見つめながらクスリと微笑んだ。

「あ、そろそろ転送が始まるみたい」

遙香の周囲を淡い光が取り囲み始めた。

続いて昴、みきも同じように光に包まれ、輝きが次第に増していく。

やがて遙香が、そして昴とみきが光に呑み込まれた。

その刹那、最後に光の中へ消えようとしていたみきを見つめる瞳があった。  
氷のように冷たい二つの——いや、四つの瞳だった。

◇ ◇ ◇

砕けたガラス、倒れたコンテナ、錆に覆われた配管、散らばった瓦礫——捨てられてからの年月を否応なく感じさせる廃工場があった。

広大な敷地に乱立するプラントは朽ち果て、建屋には縦横にひびが走っている。  
風が吹けばすべて砂塵となって消え飛んでしまうのではないか。

そんな危険で廃れた地を、一人と一匹が歩いてた。

周囲の荒廃など気にする様子もなく、小さな、だがしつかりとした足取りで進む。

やがて一人と一匹が一つの建屋へと入っていく。

暗闇に覆われている通路を進み、奥へ奥へ——明かりが灯った一室へとたどり着いた。

「あら、戻ったの？」

書類や実験器具が乱雑に散らかった研究室に一人の女性がいた。

イスに深々と座って物憂げな表情で天井を見つめたまま、視線だけを入り口へと傾ける。

「……………お友達……………いじめられた」

悔しげに呟く。

胸の奥から突き上げる怒りを抑えつけ、涙となって瞳から滴り落ちた。

その雫を額に受けた一匹が——小さなイロウスがぶると身を震わせた。

「……………そう」

その様子を眺めていた女性は、しばしの沈黙の後、立ち上がって少女へと歩み寄った。

その身体をそっと抱き寄せ、背中をさする。

「きつと悪い人たちのね。サドネのお友達を傷つける悪い人…………」

少女の耳元に顔を寄せた女性は、ねつとりと、しみこませるように囁いた。

「悪い人…………。エヴィーナと同じ格好なのに…………」

少女の問いに女性——エヴィーナがゆっくりと頷く。

「そうなんだ…………。悪い人なんだ。お友達を…………サドネのお友達をいじめる悪い人…………」

少女の瞳の奥にはの暗い闇が宿った。